



ライアン・ゴシンスキー Photo: Patrick Baldwin

10月号の主な記事： こうして入団が決まりました！

今月号の日本語ページは、マギー・フォイヤーが9人のバレエ学校卒業生に聞くオーディション合格の秘訣です。

相変わらずのカンパニーの側の買い手市場で、今年もまたバレエ学校を卒業する生徒たちにとっては就活に苦勞する一年間となった。インタビューを通じて明らかになったのは、採用を勝ち取ったダンサーたちには二つの共通点があるということである。それは、何としても仕事を勝ち取るという情熱、そしてどうすればそれが可能なのかを見定める視点、である。

まず覚悟しておきたいのは、予想外の結果もありうるということ。ライアン・ゴシンスキー（セントラル・スクール・オブ・バレエ）は「オーディションのクラスの出来は最悪だった」がエストニア国立バレエに採用され、シニード・バン（エルムハースト・バレエ学校からバイエルン州立歌劇場バレエへ）は「全部のオーディションを通じて一番うまくいった」と感じたノルウェー国立バレエには不採用だった！またハリエット・ミルズ（ロイヤル・バレエ学校からドイツのカールスルーエにあるバーデン州立歌劇場バレエへ）は、「オーディションを受けに行くと、落ち込んでしまうこともありますね。私はウィーンの時がそうでしたが、なんとか立ち直りました。」アリス・バーチー（イングリッシュ・ナショナル・バレエ学校からポーランド国立バレエへ）のアドバイスは、「受からなかったからといってくじけちゃダメ。空気がないのに形だけオーディションをしなくてはならないとか、誰を採るか事前に決まっているとか、団の側に事情がある場合もあるんですから。」彼女がこう断言するのも、ボルドーで個人オーディションとしてカンパニー・クラスを受けた時、誰も彼女を審査に来なかったという悲惨な体験があったからこそだろう。

彼らがまず最初にしたのは、ポートフォリオを作ることである。どの学校も履歴書を中身の濃い一枚にまとめるのを助けてくれ、一流のダンス写真家に予約を入れ、撮影時にはスタッフが同席して足の向きを修正したり、もっと見栄えのするポジションを提案したりしてくれたという。履歴書や写真がよいだけでは採用に直結しないが、書類審査でカンパニーの目を引くことは可能である。

その一方で、ダリオ・エリア（ロイヤル・バレエ学校からチューリヒ・バレエへ）は、カンパニーは履歴書をほとんど（少なくとも芸術監督は全く）読んでいないのではと考え、実際に力になったのは学校で受けた訓練だったと感じている。彼のオーディション体験はじつにユニークで、注目に値する。履歴書と写真をチューリヒに送りオーディ

ションに行ってみると、男子の受験者は他に299人いた。「スタジオは広くなく、ぎゅうぎゅう詰めでした。ジャンプまでは受けたんですが、次の日ロンドンに帰る飛行機が遅い時間だったので、思い切って聞いてみたんです。『続ける代わりに、カンパニー・クラスに出させていただけませんか』って。翌日は監督のハインツ・シュベルリも見に来ていて、クラスの後呼びとめられました。『本当に申し訳ないんだが、昨日は人が多すぎて君のことをちゃんと見ていなかった。』そしてその場でコール・ドの契約をもらいました！」

ニコル・エドモンズ（エルムハーストからフィンランド国立バレエへ）の場合は全く違い、「人数は多かったですが、段取りがよくスムーズでした。監督のケネス・グレーヴェの配慮のおかげで、とても気持ちよく受けられましたね。審査員の数はどこよりも多くて、常にチェックされている感じでした。」応募する側としてはエストニア、ポーランド、フィンランドの例のようにクラスを通して受けたいと願うものだが、人数が多すぎる場合には、有望な応募者のスペースを確保するために一部を途中で退室させることもある（それがあなたではありませんように！）。

ほとんどの芸術監督は審査をクラシックのクラスで行い、コンテンポラリー作品の抜粋やパ・ド・ドゥを踊らせるところが一部にあるといった程度。事前にヴァリエーションを指示しておいて審査するところは、ほとんどないのが実情である。そうした中、創造的な要素もチェックする数少ない例が、ポーランド国立バレエである。前述のアリスは、バレエ・クラスでは難しいエクササイズを指示され、行うのは一度きりで挽回のチャンスがないのがきつかった、残れたのは驚きだったという。通過者が踊ったコンテンポラリー作品は「クシユトフ・パストールがその場で作ったものだと思います。プロとして仕事をしているような雰



シニード・バン Photo: Peter Teigen

囲気で、すごく楽しかった。絶対に受かりたいと思いましたね。」ジョージ・ウィリアムソン（イングリッシュ・ナショナル・バレエ学校から同じくポーランド国立バレエへ）は、振付に興味がありパストールと仕事をしたかったので、目標をここに絞っていた。「これから受ける人は、個人でオーディションしてもらえよう、がんばって申し込んでみてください。自分が受けているカンパニーについて、よくわかりますから。僕にとって最高だったのは、クシユトフがクラスのはじめに見に来てくれて、リラックスしてクリーンなテクニックで踊るよう集中しなさいと声をかけてくれたこと。おかげでうまくやれる自信が湧いてきたんです。」